

特別展「板谷梅樹」の世界 昭和モダンモザイクのいろいろ

泉屋博古館東京（六本木）

24. 08. 31～09. 29



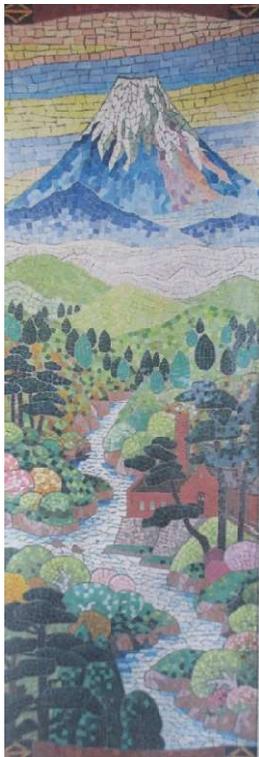
「板谷梅樹」（いたやうめき）（1907～1963）は、昭和モダンのアートシーンを飾ったモザイク作家で、かつての日劇のモザイク壁画、瀟洒な飾箱や飾皿やペンダントなど、絵画や模様を表出した独特のエキゾチックなモザイク作品は、どれも清新な色彩と可憐な意匠にあふれていることで知られている。

「梅樹」は、近代陶芸の巨匠「板谷波山」の息子で、父が砕いた陶片の美しさに魅了され、20代半ばから陶片を活用したモザイク画の制作を心然している。

その代表作は、旧日本劇場一階玄関ホールにあった「巨大なモザイク壁画」（1933年作：現存せず）であったとされている。

本展は、「梅樹作品」を一堂に集めた初の展覧会の開催で、「羽山・梅樹親子」の美の競演を楽しむことに加え、住友コレクションの茶道具が楽しめる。

板谷梅樹 《三井用水取入所風景》 1954年



現存する「梅樹」作品最大の「モザイク壁画」は、富士山麓から流れる水の穏やかな風景と、相模川と道志川の合流地点にたたずむ明治近代水道の象徴とも言えるレンガ造りの建物が描かれ、色とりどりのタイル一片一片を根気良く配置されて制作された高さ3.5メートルを超える大作で注目がされている。

板谷梅樹 《うさぎ、鳥、魚》 1935年代



画伯が好んだ吉祥のモチーフをもとにした作品で、父親「波山」が焼成に失敗し砕いた陶片が使われ、意匠や構図は二人で相談しながら制作されたもので、まさに“親子の合作といえる作品”である。

本展覧会の詳細は、『再評価された異国情緒』「昭和モダン モザイクのいろいろ 板谷梅樹の世界」として、毎日新聞 24. 08. 30 に解説がされている。